



本

3月7日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

3月7日のおはなし「本」

読むものがなくても、お話には不自由しなかった。

彼らがいたから。

彼らの誰かが話を始めると、たちまちそこは物語の世界になった。テツさんと呼ばれていた年
老いた男性は、中国の古い時代の人々の話がとても上手だった。わたしは昔の中国のこともいま
の中国のことも知らなかったけれど、お話を聞いていれば、昔の中国の市場の雑踏の賑わいや、
酒場での喧嘩の様子、権力者たちの駆け引きなどがありありと目に浮かんだ。テツさんは家に棲
みつく不思議な生き物についてのちょっとこわい話も上手だった。怯えながら話を聞くわたしを
見て、シェリーと呼ばれていた女性がテツさんをたしなめていたことも思い出す。

シェリーさんは、本当はノリコさんというのだけれど、みんなにシェリーと呼ばれ一目を置か
れていた。たぶんお話がとても上手だったからではないかと思う。そう。お話をすることが彼ら
の仕事だった。もっとも、わたしが彼らと暮らした子ども時代、彼らはその、お話の仕事、をで
きなくなっていた。わたしが生まれるよりずっと以前には、彼らはみんな世界中を飛び回って、
世界中の人々にお話を聞かせていたのだという。それがどういう仕事なのか、小さいころのわた
しにはよくわからなかったけれど。

彼らの中で一番若かったトオルさんがわたしに話してくれただけでも、イラク、コンゴ、南オ
セチア、チェチェン、スペインなどの国に出向いていろいろなお話をしてくれたい。トオルさん
は自分が訪れた国の風景や、人々の親切さ、食べ物のおいしさの話をしてくれただけで、わたし
は自分も遠い国を旅しているような気持になった。旅先でスリにあたり、食べ物が合わなくて
お腹をこわしたり、なんて話も胸がドキドキするくらい夢中で聞いた。

でも、トオルさんがときどき興奮して、世界が我々を必要としていたんだ！と熱心に話し始め
るとテツさんや、アオイさんがニコニコしながら、およしなさい、マチコがびっくりしてるじゃ
ないかとなだめたものだ。確かにかつて世界は我々を必要としていたかもしれないけれど、いま
は我々にうろちょろしてほしくないと思っている。いま我々はマチコちゃんにお店に行ってもら
わなければろくに食事だってできない状態だ。大事にされた時期もあるが、いまはこの通り邪険
にされている。イッテコイ。プラマイゼロ。それを受け入れなくては。

だけど！とトオルさんは悔しそうに言いかけてやめる。トオルさんはテツさんやシェリーさん
やアオイさんや、無口なゲンさんや、“魔術師”と呼ばれていたハラさんのことを本当に尊敬して
いたからだ。トオルさんは時々こっそりわたしに彼らがどんなにすごい語り手なのかについて聞か
せてくれた。世界各国の紛争地を訪れ、時には独裁者に会い、時には要人の中の何人かに会い、
時にはその国の議会で演説し、彼らをお話の中にさせたそうだ。ナレーターは政治家でも外交
官でもない。ただ面白い話をするだけ。なのに、多くの場合、一触即発の状態にあった紛争は小
康状態に戻るのだという。

ナレーター・システムは世界的に評価されていたんだ。理詰めでもなく、感情論でもなく、も
ちろん武力や威圧や脅迫でもなく、紛争を実質的に緩和させる解決策としてね！そしてトオル
さんの先輩たちがどこの国でどんな活躍をして来たのか、熱心に、しかしこっそりと聞かせてく
れた。いまでもわたしはその時のトオルさんの目を覚えている。トオルさんはテツさんやシェ
リーさんをはじめ、いまはここにはいない人たちも含めて、先輩の語り手たちを本当に尊敬して
いて、自分とはもかくその語り手たちがいま、こうして不遇の環境にあることを心から悔しがっ
ていたのだ。子どものわたしにもそれがすごくよく、くっきりとわかった。

ある晩、みんなが集まっているとき、それは始まった。きっかけはわたしのひと言だった。み
んな、いつからそんなにお話が上手だったの？ いつから？ 珍しくゲンさんが口を開き、いろ
いろあるね、と言った。最初の仕事の時、ナレーター・システムに採用された時、人生で初めて

自分が語り手だと気づいた時、“魔術師”のハラさんが認めてくれた時、さあどれが面白いだろう？

初めてのこと、ね。うっとりとした口調でシェリーさんが言い、そうだとテツさんが応じて、その話が始まったんだ。当代随一の語り手たちが、自分が語り手だと悟った初めてについて、目もくらむようなお話が始まったんだ。この本は、そのときわたしが聞いたお話の本だ。

(「初めてのこと」 ordered by タリン-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

本

<http://p.booklog.jp/book/45832>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/45832>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/45832>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.